

「令和5年度 第1回研修会」10月24日開催

今回の研修会は、「セルフ・ネグレクトのアセスメントとケア」をテーマに、東邦大学看護学部長／大学院看護学研究科教授の岸恵美子先生からお話をいただきました。今回、より多くの方に受講していただけるよう、オンラインによる開催と併せて、オンデマンドによる配信も行いました。

➤セルフ・ネグレクトとは

「健康、生命および社会生活の維持に必要な個人衛生、住環境の衛生もしくは整備、または健康行動を放任・放棄していること」。いわゆるゴミ屋敷やペットの多頭飼育などもセルフ・ネグレクトに含まれます。高齢者の場合は、認知症や精神疾患・障害、アルコール関連問題などを抱える方も多く、支援を拒否することもあります。生命・身体に重大な危険が生じるおそれや孤立死に至るリスクを抱えているため、関係部署・機関の連携体制を構築していくことが必要とのことでした。

➤セルフ・ネグレクトと権利擁護支援

セルフ・ネグレクトは、助けを求める力が低下、欠如している状態のため、本人の意思を尊重し、本人の意思決定能力に配慮しながら、生命のリスクを回避するための説明と意思確認をその都度行っていくことが大切。チームによる早期からの継続的な支援も必要であり、必ず関係者で協議し、決定事項を根拠とともに方針・支援計画を記録に残すことが重要。後々裁判になった場合に、記録は大切な証拠となるそうです。

➤セルフ・ネグレクトのリスク要因、実態

セルフ・ネグレクトは、精神・心理的な問題だけでなく、ライフイベント、高齢による心身機能の低下、社会的孤立、経済的問題や、他者からの虐待など様々な要因があるとのこと。孤独死事例の8割が生前にセルフ・ネグレクトだったという分析結果や、セルフ・ネグレクトの高齢者は1年以内の死亡リスクが5.82倍という調査結果などがあり、発見したら即対応することが大切。また、「月1回以上週1回未満」しか他者と交流しない高齢者は、人付き合いが「毎日」ある高齢者に比べ、要介護2以上になる介護リスクが1.40倍、認知症リスクが1.39倍高いというデータもあり、人との交流の大切さをポピュレーションアプローチにより普及啓発することも必要とのことでした。

➤極端に不衛生な家屋（いわゆる「ゴミ屋敷」）で生活する人の特徴

ものがたまるのは、ゴミを認識しつつ「片付かないタイプ」と、ゴミではないと認識し、ものへの執着や手放すことへの苦痛を感じる「ためこみ症」などを含む「ためこみタイプ」、混合タイプがあり、整理する決断ができない場合は、本人が理解・納得できる指導や条例等による抑止が有効であり、モノへの愛着をコントロールできない場合は、専門職による寄り添い支援が有効とのことでした。

➤セルフ・ネグレクトの人のアセスメント

セルフ・ネグレクトのアセスメントツールがあるので活用を。認知力や判断力が低下しているような非意図的な人には、すぐに支援が必要であり、遠慮や気兼ね、生きる意欲の低下などグレーゾーンの人には自己決定を含めて支援が必要です。自分の意思と判断に基づいているが、客観的にみるとセルフ・ネグレクトに陥っているような意図的な人は、支援が必要になる可能性があり、情報提供など関係性を築きながら、必要時介入することが大切とのことでした。

➤セルフ・ネグレクトの人への支援

支援のポイントは、①自己決定を尊重する、②生命のリスクを見極め、明確に伝える、③具体的に選択肢を提示する、④価値観・ライフスタイルを尊重する、⑤エンパワーメントし、その人らしい生活を支える、⑥チームで支えること。ためこみのある人に、初期の段階では「片づける」を言わないこと。

➤セルフ・ネグレクトの課題

地域包括ケアの切れ目に落ち込んでいるのがセルフ・ネグレクト。孤立しない、させないことが大事。重層的支援体制整備事業の中で、全世代のセルフ・ネグレクトをどのような体制で救えるのかを考えていくことが必要。下流の問題を、上流でいかに対応するか、予防の視点が大切。まちづくりに関わる保健師は、セルフ・ネグレクトの人を受け入れられる地域づくりを考え、アウトリーチと居場所づくりを組み合わせながら、予防を含めた支援の仕組みを構築していくこと。ゴールは、その人らしい生き方を支援することとのことでした。

グループワークでは、今関わっている事例や対応で困っていることなどを話し合い、先生から次のような助言をいただきました。

- 地域や民生委員とのつながりが大切。訪問看護師さんは一人で抱えず、行政へ声をかけ情報提供をしていくこと。
- 未受診妊婦のセルフ・ネグレクトは、保健センターや保健所での面接で発見していくことが大切。
- カンファレンスでは、目標の共有をしたうえで、各々何ができるか発言し、役割を明確にすること。また、それを記録に残すこと。残ってしまう役割は、だれがどうするかを共有することも大切。
- セルフ・ネグレクトの人は、制服の人にはドアを開けることもあるので、消防や警察に、住民の方から直接相談することも一つ。
- 保健師にお願いしたけど断られたという声も聞く、断らずにまずは訪問に行くこと。保健師看護職の強みは、血圧や脈を測定できることであり、信頼してもらいやすい。

今回の研修を通して、セルフ・ネグレクトの基本的知識や支援のポイントを学ぶとともに、関係機関がチームとなって対応していくことや地域づくりの大切さを改めて感じました。先生のテンポ良く、わかりやすいお話でとても有意義な研修となりました。

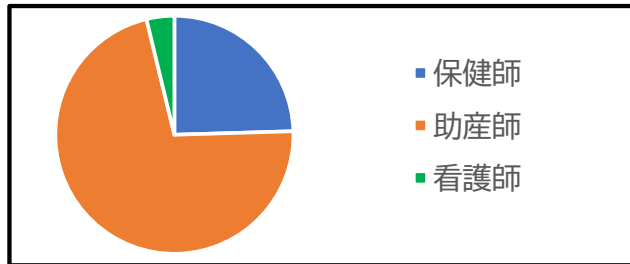
研修名	タイトル：「セルフ・ネグレクトのアセスメントとケア」 講 師： 岸 恵美子 氏 東邦大学看護学部長／大学院看護学研究科教授
研修年度	2023年度
研修日	令和5年10月24日（木）
開催方法	オンライン講習（Zoom） 及び オンデマンド配信
講演時間	13時30分から16時30分（受付13時00分から）
参加人員	申込者 79名 参加者 66名 内訳（会員 59名、非会員 7名） 職種（保健師 19名、助産師 3名、看護師 42名、その他 2名）  後日オンデマンド配信(11月2日～11月20日) 申込者 34名 内訳（会員 31名、非会員 3名） 職種（保健師 18名、助産師 1名、看護師 15名）
会 場	神奈川県総合医療会館 第1研修室より Web 配信

◆令和5年度 保健師職能委員会第1回研修会（回収数53） R5.10.24

※オンデマンド受講者19を含む

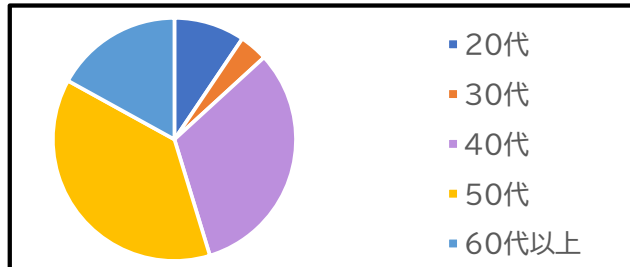
(1) 参加職種

保健師	13
助産師	38
看護師	2



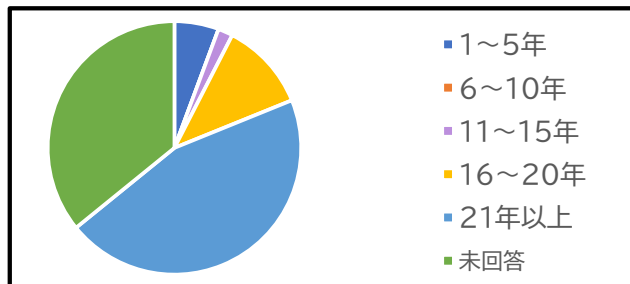
(2) 年代

20代	5
30代	2
40代	17
50代	20
60代以上	9



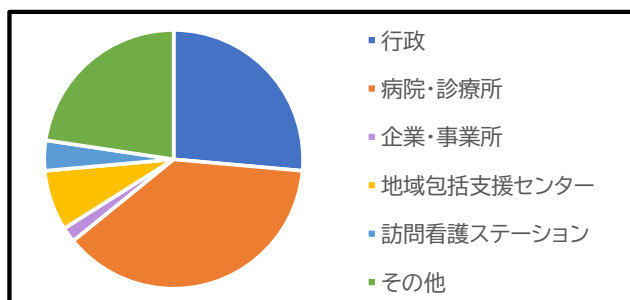
(3) 経験年数

1～5年	3
6～10年	0
11～15年	1
16～20年	6
21年以上	24
未回答	19



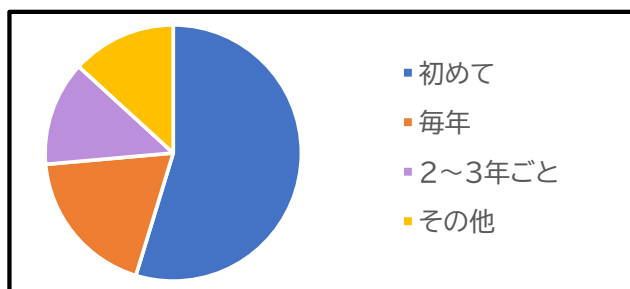
(4) 所属

行政	14
病院・診療所	20
企業・事業所	1
地域包括支援センター	4
訪問看護ステーション	2
その他	12



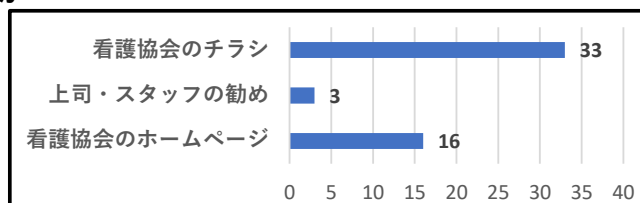
1 保健師職能委員会の企画する講演会や研修会の参加状況

初めて	29
毎年	10
2～3年ごと	7
その他	7



## 2 研修をどのようにして知りましたか

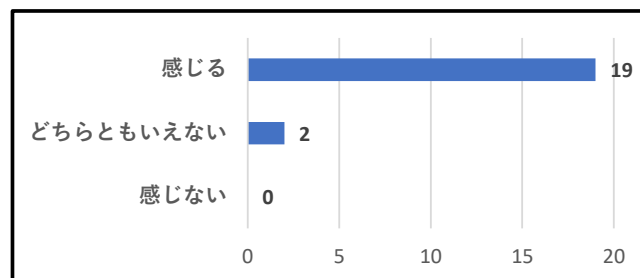
看護協会のチラシ	33
上司・スタッフの勧め	3
看護協会のホームページ	16



## 3 研修の内容について

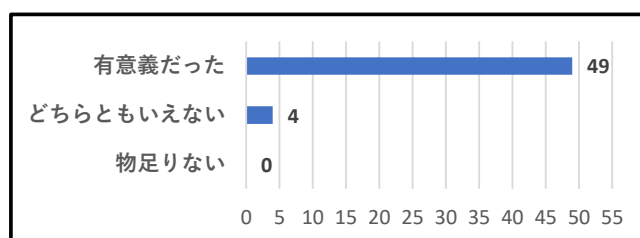
### (1) 必要性を感じるものでしたか

感じる	19
どちらともいえない	2
感じない	0



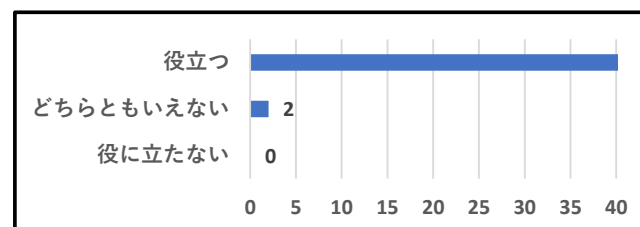
### (2) 有意義でしたか

有意義だった	49
どちらともいえない	4
物足りない	0



### (3) 今後の職務に役立つものでしたか

役立つ	51
どちらともいえない	2
役に立たない	0



## 4 研修会の感想・お気づきの点

- ・ 先生から具体的な事例を踏まえて説明があり、講義がとても分かりやすかったです。グループワークでも様々な話がでて参考になりました。
- ・ セルフネグレクトについて、看護の視点からの研修会は初めて参加しましたが、どの項目も具体的で勇気もらえました。アセスメントツールや支援ツールというものがある事を知らなかったので、是非現場に取り入れていきたいと思ひますし、地域ケア会議やネットワーク会議でも活用できるような気がします。
- ・ セルフネグレクトは膠着するようなケースから緊急を要するケースまで様々で、特に介入自体に抵抗があり本人と会えないケースにどう対応すればよいのか悩む日々でした。諦めずにアプローチをし続けることが信頼関係構築の一步であること、関係機関みんなでケースに対応していくことが大切だと改めて認識することができました。
- ・ オンライン配信がとても助かりました。少しの空き時間を使って少しずつ見進められました。今後こういう研修がどんどん増えてほしいと思ひます。